

抄 録

○蛙の筋神経標本に於ける「クロナキシー」の測定及び「クラリン」中毒による變化に

就て. Paul Vogel, Die Bestimmung der Chronaxie am Nervmuskelpreparat des Frosches und ihr Verhalten während der Curarinvergiftung. (Zeitschrift für Biologie. 83. Band, 2. Heft.)

著者は「クラリン」にて中毒せしめたる蛙の筋神経標本に就き刺戟用ヘルムホルツ氏振子を用ゐる間接刺戟により「クロナキシー」の測定を行へり。此實驗にて若し筋肉のみを毒液中に浸せる場合には筋神経の興奮性は間接刺戟の結果が全く無効となるに至る迄一定不變なり、此はラソック氏の成績に一致す。若し筋肉と神経とを共に稀薄なる「クラリン」液の中に入らるる時には「クロナキシー」の延長を觀る之はギルテマイステイ氏の成績に一致する所なり。其説明は各神経纖維が異なる「クロナキシー」を有するを假定するか或は「エレクトロトノムス」の現象によるものと見るを得べし。何れにしても「クラリン」液によりて表在性の運動神経纖維の傷害せらるるによりて起ることを得べし。又生活神経を検査神経の下に敷くときは検査神経の「クロナキシー」を延長せしむ。死せる神経又は濕せる綿を下敷にするも何等の影響なし。生活神経の下敷による現象は「エレクトロトノムス」の爲めに刺戟電流の攪亂せらるるによる。

室温の「リッゲル」液内にて「このさま」蛙の筋神経標本を 5 耗、極の距離 17 の鹽化銀を被れる銀導子にて刺戟して定めたる「クロナキシー」は 0.45 σ なり。振子にて測りたる「クロナキシー」の値と蓄電瓶にて測りたる値とを比較したる成績によるとラソック氏の係數 0.37 は小に過ぎ其係數は 0.51 ならざるべからざるを發見せり。

(生理, 増田抄)

○人類に於ける毛細血管の收縮性に就て.

Nesterow, Über Contractilität der Blutcapillaren beim Menschen. (Pflügers Archiv für die gesamte physiologie. 209. Band, 4. Heft.)

著者は此實驗を温、寒、電氣、鬱積性充血及び理學的刺戟を用ひ且其上自然な患者を使つてやつてゐる此實驗は定性的にやつたので其反應の定量的方面には觸れてゐない其故に數字上の立證はやつてゐない、その結果を次の様に發表してゐる。

1. 人類の皮膚に於ける毛細血管は温熱、寒冷、電氣、光、鬱積性充血による興奮並に内的原因の興奮に對して直接に反應せない従つて血液の能動的前進作用に大なる意義を有せない事は明白である。

2. 上述の興奮の際に毛細循環に起る種々な變化即ち貧血や充血や又は是等が交り合つて起るのは、通常之を毛細管の變化によるものとしてゐるけれども其原因は主として先づ小動脈が口徑を變化し、毛細管は之が爲めに二次的に變化するに過ぎない。

3. 毛細管に接觸してゐる小動脈は神経の精巧な支配の下に分佈區域の血行の調節を營んでゐる、之で以て觀ても更に毛素管に自動的に收張をする必要のない事が解る。

4. Schiff が始めて家兎の耳の血管で氣の付いた血管の太さの間歇的の變化は其後多くの人々から外の處にある血管にも認められたが、此變化は人の小動脈にも存在する。

著者は以上の事實で臨牀上に見る多くの毛細管症狀を説明し得ることを云つてゐる例へば心臓の搏動によつて起る

著しき動脈内血圧の變化が毛細管内の血圧には極めて僅かの影響しか持たないことは小動脈が毛細管の前方にあつて其の壓力を吸收するによる。又かの毛細管の搏動は實に毛細管の搏動ではなくて小動脈の搏動の結果である。(生理, 岡田抄)

〇「スペクトル」の桔棒作用の範圍竝に "Radiodermatitis" 及び腫瘍の治療として長

波長線放射應用に就て。 J. Risler et P. Mondain, Sur la limite de l'action antagoniste du spectre et l'application des radiations de grande longueur d'ondes au traitement des radiodermites et n'eoplasmes. (Comptes rendus Hebdomadaires des séances de l'Académie des Sciences. Tome 180. No. 5.)

赤外線が短波長線と桔棒作用ありきは既にある一部の人によりて記載されし所にしてその實驗は寫眞術及び生理學の範圍にて行はれしものなりしが著者は「レントゲン」線によりて照射され次に赤外線の影響を受けし組織は何等 Radiodermatitis も起らず組織學的變化も表さざりし事實を報告し尙ほ Radiodermatitis 竝に上皮性腫瘍の治療上應用し得んことを述べり。

その觀察によるに先づ短波長線の放射と桔棒作用を有するは赤外線中特に嚴重なる境界あるに非ずして吾人の眼に見ゆる「ナトリウム」の D₂ 線に當る波長 589 μ. の範圍に迄擴れり。

實驗には黃色、赤色竝に赤外線部の約 55% の範圍を通過さす厚さ 2 mm の荷電なき造形物質 (Phenol-formol) を以て作りし濾過器を用ひ、尙ほ酸化「クロム」竝に「ストロンチウム」及び「リチウム」鹽を含める 2 本の炭素電極より發する「アーク」及び火華、距離 25 cm にして焦點型の軟瓦斯管より發する「レントゲン」線を使用せるものにしてその實驗竝に成績次の如し。

A) 4 匹の毛を剃れる天竺鼠を各 X 線に 15 分、「アーク」を上述の濾過器に濾過せしものに 30 分曝露し、別に對照動物 2 匹を單に X 線のみ照射せしめしに、對照動物では第 15 日目に Radiodermatitis の初期症狀として表皮剝離を伴ふ皮膚發赤現はれ、第 25 日目には皮膚の色素沈着が褐色に變じ第 30 日頃には毛髪が斑紋狀に速かに著しく脱落せり。又對照動物中の 1 匹は最初の體重 690 gr. が第 48 日には 540 gr. に下り、初め 570 萬の赤血球は 478 萬となりて回復せず、然るに白血球は第 1 日の 6800 が第 48 日には 10000 となり此白血球過多も引續き存せり。之に反し「アーク」を濾過せし放射線にて處置されし 1 匹は Radiodermatitis の症狀も、何等病的變化も表はさず、彼等の體重は夫々 50, 60, 20 gr. 増加し、血球の變化も例之赤血球は下記の如く兩種放射共一時減少を招致するも間もなく放射後 8 時間頃には正常狀態に回復せり。

		Avant X	Après X	Après infrarouge.
Sujet	No. 4.	5475000	4800000	4555000
„	No. 5.	5320000	5045000	4380000

B) 第二段の觀察として二様の方式により Radiodermatitis 及び腫瘍の治療を施せり。その一は「アーク」より前述の如き濾過せる放射線を放射し、他は刺戟用放射線存在の許に螢光及び磷光に患部を曝せるものにして、此問題にて思ひ起すは「エオジン」=「セレンウム」の注射による二十日鼠の癌治療法に關する Wassermann 氏の研究の如く Jacobson 竝に Tappeiner 兩氏により狼瘡及び癌に就て公表されし實驗なり。

その内

1) Radiodermatitis の治療としては先きの實驗にて本症に罹患せる動物に單にかの濾過器にて濾過せし放射線を作用せしめしに第 4 回目には著しく治癒し、かの斑紋は第 3 回の終りに既に消失治癒せり。次に

2) 2匹の前同様罹患せる家兎に於て、患部を燐銅を含める硫化亜鉛にて覆ひ、毎回先づ初に「アーク」をそのまま或は酸化「ニツケル」を含める硝子の濾過器を通して照射せし後、酸化「ニツケル」の濾過器をかの前述の造形物質にて作れる濾過器に交換せば全く相反する一組の放射作用の爲め硫化亜鉛は著明なる Photoluminescenz の現象を現はして反應するを以て此二操作を反覆せしに、其結果斯く處置されし2匹の家兎は特に速かに治癒せり。

C) 以上に關聯して實驗的に X 線に就ても Stoke の法則の適用さることを確めたり。即ち 3 cm の厚さの燐光を發する硫化亜鉛の衝立を横切つて X 線でその腕を放射されし一動物は延べ時間 15 時間 (8000 R) の放射の後にも何等組織學的に表在性變化を示さず、故に X 線は長波長線 (螢光) の放射で變化せしものならん。

(生理, 林抄)

○冷却毒及び痙攣毒の作用機轉 (體温下降の神經性機轉の補遺). Rosenthal, Licht und

Lauterbach, Der Mechanismus der Kühl- und Krampfgifte. (Ein Beitrag zum nervösen Mechanismus der Untertemperatur.) (Arch. f. exp. Pathol. u. Pharmacol. Bd. 106, II. 3/4, 1295.)

冷却毒並に痙攣毒の作用機轉は急性「インシュリン」中毒の夫さは本質的に相違せるものである。延髓性痙攣毒の場合には過血糖症が起り、急性「インシュリン」中毒の場合には血糖減少症が起る。痙攣毒に依る體温下降は「インシュリン」に因る體温下降とは全然異りたるものとして説明すべきものである。「ピクロトキシン」、「アコニチン」及び「ヴェラトリン」は交感神經中樞の興奮に依り過血糖症を來す。此過血糖症は内臟神經分岐部の上方にて脊髓を横斷した後は起らず、内臟神經分岐部の下方に於て夫を切斷した場合には又起る。該過血糖症は「エルゴタミン」に因り抑制される。冷却毒並に延髓性痙攣毒は最早純粹なる中樞性副交感神經興奮毒として觀察さるべきを得ない。「ピクロトキシン」、「ヴェラトリン」及び「アコニチン」は温の放散を増加し、温産生を減少せしめる。其終末臓器に於ける新陳代謝産物の障礙に基く體温下降は中樞性のものである。實際興奮機轉は脊髓傳達路に依り更に末梢へ傳達せられる。此傳達神經路は第7及び第8頸椎と第1及び第2胸椎との間より現出してゐる。今若し第7及び第8頸椎の下方迄に於て頸髓を横斷するならば、延髓性痙攣毒に因る體温下降は起らない。併し第2胸椎の高さ或は其下方にて脊髓を切斷する時は該體温下降は起る。其故に體温低下性脊髓傳達路なるもの存在は明である。其傳達路に依り中樞性刺激が化學的温調節の終末臓器に齎されるのである。窒素排泄は「ピクロトキシン」中毒に因る體温下降の際には高まらぬが、温熱中樞の麻痺に因る體温下降の場合には高まる。

寒冷の作用に因る過血糖症は「エルゴタミン」に因りて除去せられる。故に「エルゴタミン」の侵襲點は交感神經分岐に在るさ云ふを得るであらう。(藥物, 山内抄)

○流行病研究の基礎. Carl. Prausnitz, (Deutsch. Med. Wochenschr. Nr. 41, 1925.)

近來流行病學の立場よりして再び Pettenkofer の學說に注意を惹き起し Wolter は「流行病研究の問題とその目標」の題下に於て Innsbruck の學會に於て報告せり。Pettenkofer の説が正しき時には吾人の流行病に對する説明は、根本より變更せざるべからず。

Wolter は Pettenkofer の土地説と Koch の研究との關係を調停せんさ試みたり、即ち Bodengasintoxication が第一の原因にして二次的に他の細菌をして當該疾病を起さしむる微生物を發生せしむるものと假定せり。即ち十九世紀に於て寒冷にして濕氣に富める氣候には Flecktyphus の流行を見、乾燥し温暖なる氣候には主として腸「チフス」が流行せり。彼は大流行病は天候と太陽斑點の週期的變化に關係あるものと思惟せり。然れども悲しいか

な其時代には確實に「チフス」、Fleckfieber, 同歸熱, 「マリア」の鑑別診断を下し得ざりしと同時に天候の観測も精密ならざりき、それ故に吾人が Wolter の仕事を批判するにあたり彼の主張を各流行病に就きて比較する必要あり、Pettenkofer 病は流行は病原體なる X と時と場所の素因なる Y と個人的素因なる Z との三者がよりにて成立するものとせり。この事は今日尙ほ吾人も認め得るも併し一つ疑問視さるるは Y 即ち時と場所の素因の問題なり。「コレラ」に罹れる患者は「コレラ」流行地を去るも傷害を受くる事なく、又患者は他の土地に疾病を蔓延せしむる事も甚だ稀なる等々は此處に反覆するを要せざるなり。併し Pettenkofer の不十分なる概念は Koch の確實なる病原論の前には棄去られざるべからず。「コレラ」竝に「チフス」に對する時と場所の素因と、天候とが流行病に對し關係を有する事は、全然否認し得ざる事實にして最近十年間の經驗は「コレラ」竝に「チフス」の發生が土地の清潔状態に關係なき事を示せり。即ち 1892 年の「コレラ」流行にはエルベ河の水を濾過せずして用ひしハンブルグ市には大流行を見、河水を濾過して用ひしアルトナ市には流行を見ざりき而して「コレラ」流行地なるハンブルグ市の道路とアルトナ市との道路とは直接交通せるなり。アルトナ市に於てもハンブルグ市より給水さるる Langenjammer 通りには流行を見たり。ハンブルグ市に沙濾過法が用ひられてより危険は大に減少し、1893 年には直接エルベ河の水を用ひし少數の人々に「コレラ」が流行せり。上述の出來事より公平なる判断を下す時は土地の素因竝に天候の變化が、しかく急激に作用を下し得ると思はれず。Pettenkofer は流行病豫防の基礎がこの結果を得し功勞を Koch に認めざるべからず。吾人は「チフス」に目を向ける時はハンブルグ市に於て一つの意義ある關係を見出すべし。Wolter は Typhnscurve の業績を 1925 年に發表せり。而してこの業績は既に 1900 年には完成されしものなり、余は又 1914 年までの Typhnscurve を作りしがその關係は全然相違せるものなりき。「チフス」の死亡率は 1850 年頃迄は高くして 1—1.8% を示せしが、1857, 1863 年の最高項より漸次下りて 1887 年には 0.3% を示すに至れり。この成績は Pettenkofer による時は土地に水道が引かれて清潔になりし結果と説明さるべし、而して 0.3% なる數は 500000 の都市にては常に 150 人の死亡者と約 1000 人の罹患者が 1 年にあることを示す。1884, 1886 年の「チフス」死亡率の最高項を示せる時も土地の清潔が保たれざる時は死亡率は 0.8% に止らざるべし。1893 年來缺點なき水が供給されてより「チフス」は完全に消滅せり。此處に於て余は土地病原説を認め得ざる様に思はる。「チフス」流行が四季によりて異なる事を説明するにはさして困難なる事ならず。夏期に於ては國民の移動が盛なり、實際傳染病に抵抗ある田舎の人と比較的弱き都會人とが混合し爲めに傳染率を高むるものなるべし而して「チフス」保菌者は甚だ危険にして菌をしばしば大量に排泄す、又此時期には生の果物、サラダ等を要求しかかる事が「チフス」の傳染を媒介するは疑ひなし、又蠅が病原菌の運搬者となる、かかる説明は時の素因を説明するに決定的の研究なるべし、併し事實は尙ほ複雑せるものならん。「チフス」の流行に對する最も價値ある研究は Jopley (英) Webster, Amoss (米) により鼠の社會に於ける「チフス」様疾患に就きて論ぜられたり。「チフス」竝に「コレラ」に對する感染の可能性は體中に侵入する單一の病原菌によつて目的を達せらるるものにあらず。多數のものが侵入する事によりて目的を達するものにして即ち病體の毒力、數に被感染者の抵抗力の特異性或非特異性の三つに懸れり。Wolter が今日の「チフス」に對する理論を批判するにあたり吾人の細菌學的知識の多くの缺陷を支持する事は是認せらるることは云へ、吾人は彼の推論を受け容るる事を得ず、又他の疾病に就きて説ける彼の主張も肯定するを得ず。若し彼の説を許す時には現代研究の重要な結果と等閑に附せる事となる。流感に對しては、流感が先づ第一にスペインに發生し、戦争第 1 年には諸國に起り、1917 年には廣大なる分佈區域を示し年々其の病原菌の毒力と國民の抵抗力の不平均を來たし 1918 年には最高項に達し全国的に流行を見し事は Wolter にさりて不明の事なるべし。「ペスト」に就きては Wolter にアレキサンドリエン市に於け

る死亡率の不公平、特に 1831 年と 1844 年の死亡率を氣候の關係と土地の要因に歸し、Petrie 並にその學徒の Pestfroh, Xenopsylla cheopis の生活に土地の溫度と濕氣とが如何に影響するかを明瞭に説明せる點には何等云ふところなし。Fleckfieber に就きてはその流行が一定の場所並に陣地に限らるるも雖も場所に制限なく風の死が流行を停止する事は看過されたり。「マラリア」に就きては Mückentheorie が附屬的に述べられたるも最近アセトニア、パレスチナに於ける研究は等閑に附せられたり。以上各々批評は吾人の知識の缺點を證するにあまりあれども併しそれに實を結ばしむるには尙ほ公平なる確定を必要とす。Pettenkofer の説に新しき理論を立て「人の住む土地を清潔に保てよ云ふ事は公衆衛生の第一使命にして總べての傳染病豫防に對する立脚點なり」と云ひ、細菌學者並に衛生學者にある一定程度までその主旨を認めしめしは Wolter の勳功なり。しかし流行病學は理論的知識にして細菌學的並に寄生蟲病學の完成されし時實際の人類を救ふものなり。(衛生、景山抄)

○白痴の原因たる巨大腦に就いて。 A. Jakob, Ueber Megalencephalie als Grundlage der Idiotie. (Versammlung des deutschen Vereins für Psychiatrie in Cassel 1—2. IX. 1925.)

巨大腦とは形態構造尋常であつて而かも内腦水腫を伴はざる尋常大以上の腦髓をいふのであつて、Virchow が Hirnhypertrophie と謂ひたるものである。

演者は生前白痴なりと巨大腦の例に就いて檢索し、次の如く述べてゐる。第 1 例は生來身體精神の發育不良なりと 3 年 6 箇月の小兒にして、其精神は毫も發達せず、言語、歩行其他目的ある運動を習得する能はざりしに拘はらず其頭蓋は生後 6 箇月にして周圍徑 45 cm. 大顛門に緊張を認めず。3 年 6 箇月の時には頭圍徑 55 cm. (縱徑 17 cm., 横徑 15 cm.) に達し、血液及び腦脊髄液のワツセルマン氏反應は陰性であつた。處が最後の 2 年間に右手に「アトローセ」様運動が起り尙ほ時々不定の熱發があつて、それと共に痙攣發作を反覆し遂に鬼籍に上つたのである。其臨牀的診斷は Organische Hirnerkrankung, Hydrocephalus internus? であつたが、死後解剖の結果腫瘍等の變化はなく、内腦水腫もない。腦量は 1770 g. (正常 1100 g.)、頭蓋容積 1844 cc.、小腦量 200 g. (正常 108 g.) 之を鏡檢するに皮質は其厚さを増し—前頭葉皮質 4.43 cm. (普通 3.07 乃至 3.93)、前正中迴轉皮質 4.45 cm. (普通 3.82 乃至 3.94)、後頭葉皮質 3.10 cm. (普通 2.34 乃至 2.68)—一旦其細胞數増加せるのみならず、神經細胞 (Betz 氏細胞、Purkinje 氏細胞、線狀核及び蒼白核の大形細胞等) も亦其自身形が大きき、之に反し髓質は一般に狭くなり胼胝體も亦薄い。尙ほ皮質全般に亘つて淋巴球及び組織球性細胞の腦膜浸潤、膠質増殖等を證明した。以上の處見に據り巨大腦とは其構造は尋常であつて皮質及び皮質下灰白質が増殖肥大せるを知る。只髓質及び胼胝體の狭小なる點が注意に値する。

第 2 例は比較的の巨大腦であつて 22 歳の白痴男子。其腦量 1470 g. 小腦量 205 g. 形態構造共に尋常、只胼胝體が普通の 3 分の 1 大である。

第 1 例に於て其腦下垂體に異常なく、第 2 例に於ても其内分泌諸器官は悉く正常であつた。即ち從來唱へられてゐた“眞の原發性巨大腦は Akromegalie の部分徵候であるとか或は内分泌異常に基けるものであるとかいふ”説は之にあてはまらない譯である。

由是觀之、巨大腦は寧ろ腦の發育異常に屬すべき型のものであつて、原發性矮小腦と兩極の一端を爲すものを見るべきである。Rieger が“例令其腦髓は小なりとも人は伶俐で有り得る”と謂へるに對し、演者は上記の例に據つて“腦髓が如何に大であつても人は白痴者なる事あり”と提言して居る。(精神、武野抄)

○**脳震盪症の本態に就て.** Ingmar, Über das Wesen der Gehirnerschütterung. (Deutsche Zeitschr. f. Nervenhe. Bd. 85. 1925.)

著者は小動物(鼠, 蛙の如き)を遠心器を以て振盪する事によつて脳振盪を起さしめ解剖的變化を研究し定型的の神經細胞核の變化を認むる事を得た. 核小體は既に軽度の振盪によつて振盪の方向に轉位する. 振盪が永く力強く行はれた場合には「クロマチン」の破壊を認める. かかる變化は腦質内に瀰漫性に認められ皮質に於ても又基底核に於ても同様に存在してゐる. 神經細胞の機能はかくの如き變化によつては恐らくは障礙を蒙る事なく遂行せらるる譯には行かぬであらう. 著者はそこでこの結果から見て頭蓋骨及び腦髓に加へられた力もある程度以上に達すればこれと同様な變化を來し得るものであつて臨牀的に見る腦振盪の場合にも同様の神經細胞の變化のある事を認めこれがその際に起る症狀群を説明するに他の定説よりもより適當であると説いてゐる. (精神, 武野抄)

○**モナコフ—線狀蒼白核と腦の他の部分との結合に関する研究.** Monakow, C. von, Experimentelle- und pathologisch-Anatomische, sowie entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen über die Beziehungen des Corpus Striatum und des Linsenkernes Zu den übrigen Hirnteilen. (Schweizer Arch. f. Neurol. u. Psych. Bd. XVI. H. 2. 1925.)

晩近 C. n. O. Vogt 及び A. Jacob の二大名著によつて外錐體系統に關して多くの事を學んだ吾々は斯界の權威者モナコフの意見を大略此の短き論文によつて窺ふ事が出来る. それに依るに彼も亦線狀體と腦皮質との間に何等の結合なき事を認めてゐるが従前の考と異なる點は蒼白核と前頭, 顳額葉皮質との間に結合を證明する事を得たと云へる事である. この點は可成重要であつて吾人は輕々に信ずる前に多くの複試が必要であらうと思ふ. 尙ほ著者は線狀體の障礙せられた際に見らるる運動性刺激症狀はその一部分が神經造構の破壊によるものであつて大部分は腦脊髄液, 脈絡叢, 腦室壁の障礙に歸す可きもので, 純粹の線狀體の破壊は軽度の運動障礙を齎すものであると云ふ意見を有してゐる. (精神, 伊原抄)

○**瞳孔神經支配の疑義.** Grünstein u. Georgiffmoskau, Zur Frage der pupillennervation. (Zeitschrift f. d. gesamt. Neurol. u. psychiat. Bd. 40. H. 4.)

著者は1例の剖検例を記載した. その例は生前には内眼筋に何等異常がなかつた. 然るに剖検の結果によるに動眼神經主核は甚しく變化し唯一側の一小部分だけは健全であつて, 「エザンガー」, 「ウエストフール」の核は大部分健全であつた. 尙ほ又右側動眼神經主核の機能は全く侵されてゐたにも拘らず瞳孔括約筋及び毛様筋の作用は健全であつた. 此點より考へる時は内眼筋の中樞は動眼神經主核に非ずして寧ろ「エザンガー」, 「ウエストフール」の核に求む可きであらう. (精神, 伊原抄)

○**結節癩の雪狀炭酸治療後の補體消費に就て.** Paldrock, Der Komplementverbrauch bei Kohlensäureschneebehandlung der tuberösen Lepra. (Dermat. Wochenschr. Bd. 81, Nr. 40, 1925.)

Ellasberg 氏は健康人血清中の補體含有量は海狸の夫よりも 10 倍少き事竝に癩患者の血清中には一般に遊離補體の缺如を確定し, 此の事實を以て癩が常に進行性にして不治の疾患なる事の一根據となせり.

著者は是が追試験を行へり. 6 週間の雪狀炭酸療法を終れる 10 人の結節癩患者の血清に就て補體含有量を檢したるに凡て血液中に遊離せる補體を證明したり.

8週間後(其間何等治療を施さず)補體検査を行ひたるに5例は増量し、他の5例は減少せり。此後の5例は凡て一時寒冒に侵されたるものなり。即ち癩患者血液中の補體は治療を施さざれば、其間他の病に襲はれざる限り漸次増量するものと思はる。

尙ほ他に4人の患者を試験したるに多量の補體を有し少量の血清にて既に完全溶血を示せり。

次に非動物性血清を以てせる平行試験は全部不溶解に終り、双接體の對照も同様なりき。補體含有量は年齢、疾病の持續期間並に發育程度には關係せざるが如し。

著者の實驗に於ては癩患者中の或る者は健康人と同量の補體を有し、或る者は夫よりも多し。且癩血清中には遊離補體を認めたり。故に Ellasberg 氏の結論は不當なり。

尙ほ興味あるは雪狀炭酸療法が補體消費と關係有りや否やと云ふ事なり。著者は該療法後48時間にして補體量を測定せるに或る者にては著しく消費せらるるも他のものは消費量頗る少し。此後の現象は始めの補體含有量餘り多きがため其消費量比較的著明に現はれざるに依るをなす。

此補體消費なる事實は癩患者の雪狀炭酸療法の結果として起るものにして、又其結果遠隔部に在りて該治療を受けざる癩結節が消失し、又吸収せらるる事は抗體が遊離し來る結果として雪狀炭酸療法が動物性免疫の正常なるを證明するものなり。(皮泌、内田抄)

○内科的腎臟疾患の外科的療法に就て。 Strauß, Zur Frage der chirurgischen Behandlung interner Nierenkrankheiten. (Zeitschrift für Urologie. Bd. 19, Heft 7, 1925.)

著者は定型的尿毒症を起せる急性又は亞急性腎炎の5例、軽度の亞急性尿毒症を起せる亞慢性混合性腎炎(腎臟炎+「ネフローゼ」)の2例、昇汞「ネフローゼ」の2例、有痛性出血性腎炎の2例及び尿毒症の徴候なき軽度の腎機能不全を伴へる慢性出血性腎炎の1例、以上12例の腎剝皮術を行へる症例を發表せり。

其内著明なる効果を認めしは只亞慢性又は慢性混合性腎炎の際に於ける亞急性尿毒症の2例及び一側の有痛性腎炎の2例に於てのみにして、急性又は亞急性腎炎の尿毒症及び昇汞「ネフローゼ」の際に於ける手術的效果は認むる事能はざりき。

前記混合性腎炎の際の亞急性尿毒症の2例は程紅熱に續發せるものにして、何れも手術前1—2週に於て高度の減尿、嘔吐、頭痛、衰弱を起せるものなり。

又偏側有痛性腎炎の2例は共に急性腎炎後蛋白尿及び血尿の他、時々高度の腎痛を伴へる強度の血尿を訴へしものなり。

前記兩例共其手術成績は良好なりき。尙ほ尿毒症及び無尿症を伴はざる慢性絲絨性腎炎の1例に對する手術的效果は認められずして、已に手術後數日にして心臓不全の徴候表はれしと云ふ。

著者は之等の經驗によりて、有痛性出血性腎炎及び慢性腎炎に於ける亞急性尿毒症を除きては手術的機轉に關し養成し得ず、急性腎炎の尿毒症の際の腎剝皮術に關しては多くを期待せず、却て手術を行はずして輕快を來し得と。

尙ほ續發性萎縮腎の尿毒症の手術は之を避け、尿毒症或は無尿症なき慢性腎炎の剝皮術は前述の如く結果は認められずとせり。(皮泌、田代抄)